

本多虔夫（横浜市立市民病院神経内科，横浜市立友愛病院） 著
重野幸次（伊豆菰山温泉病院，慶應義塾大学神経内科）

脳卒中・神経筋疾患のマネジメント QOL 向上のために

高木康行（東京都済生会中央病院神経内科）

一般に神経・筋疾患というと、むずかしいものわかりにくいものとして、なんとなく敬遠されがちだったイメージがある。一方、ややもすると結果のすぐでる急性期の医療が脚光をあび、地味な慢性疾患の医療・ケアについてはあとまわしにされ、よい解説書もなかったのではないと思われる。

本書は神経・筋疾患の診療に長年たずさわってきた著者らの豊富な臨床経験を土台とし、それに簡潔な論理的説明を加えながら、実践の場で直接役立つテキストを書くようとして成功した貴重な本である。

慢性期の医療ではチーム医療が特に大切であることをふまえ、本書の副題にあるように患者さんの Quality Of Life の向上にむけて、医師にとっては患者マネジメント上必要なこまかな医療技術・ケア・リハビリテーション・社会福祉などの知識をしっかりと確認するため、レジデント・ナース・パラメディカルの人々にはこれに加え

て疾患をやさしくきちんと理解できるようこまかく配慮されている。

近年の長寿社会においては、脳卒中後遺症・パーキンソン病・痴呆性疾患などに対する理解は全ての医療従事者がもっていなければならないものである。また、筋萎縮性側索硬化症をはじめとする代表的な神経・筋疾患に対する記載も簡明・ストレートで専門家でない人にも非常にわかりやすい。

また、治療面を治療的マネジメントとしてより広い意味でとらえ、他の本にはない実用的で率直な意見が述べられている。

症状に対するマネジメントとしてとりあげられた項目は意識障害・けいれん・運動麻痺・歩行障害など基本的なものでレジデント・ナースにはことに役立つ。また、廃用症候群のもとには一見おろそかにされそうな事項を著者の目を通して丹念に書き込まれている。

神経疾患患者のマネジメント

上りリハビリテーションは不可欠である。しかし、疾患単位のリハビリテーションの特徴をこの本のよう丁寧な解説したものはいまなかった。リハビリテーションの教科書は総論に重点をおいたものが多く、患者管理という点で利用しにくいものであった。その意味でもこの本は非常に貴重である。リハビリテーションの各項も、理学療法にとどまらず言語療法やソーシャルワークにも言及し ADL の総合的向上を目指して書き込まれている。また、日常臨床でわずらわされることの多い“しびれ”や排泄にもふれている点は読んでいても新鮮で著者らの意気込みが感じられる。

本筋の記載の間にちりばめられた Q & A 方式のメモは、実際診療の場で直接役にたつ知恵であり、一般の成書には書かれていないものである。

本書を通読して、全体にチーム医療を中心とした慢性神経・筋疾患を実際に診療するうえに必要な基本的な考え方・知識・技術がポイントをつかんで述べられているが、その底に著者らの心あたたまる情熱がくみとられ、若い医師・ナース・パラメディカルなど多くの人々がこの書に接して、本書のめざす医療の方向を理解されることを望みます。

(B5, 頁216, 図35, 写真71, 1989, ¥3,708〔税込〕, 医学書院 刊)